

言い訳の有効性に関する心理学的研究

小熊 啓介
(文化情報論分野)

要 約

我々は他者とのコミュニケーション場面において、意図せず相手を傷つけてしまう場合がある。その際に関係を修復したいという意図から用いられる言語手段の一つが、言い訳である。一口に言い訳と言っても様々な場面、内容が考えられるが、言い訳について詳細に検討している研究はみられない。そこで本研究では、言い訳をする状況・内容の分類を試みることで、言い訳をする状況に陥った際、どういった内容の言い訳を選択することが有効であるのかを検討した。さらに、我々が言い訳をする際はどのような言い訳を選択しているのかを明らかにした。研究1では、信州大学生20名に対しインタビュー調査を実施し、言い訳にはどのような状況や内容が存在するのか収集、分類を行った。その結果、状況については過失・拒否・ごまかしカテゴリー、内容については自己帰属・他者帰属・外的帰属カテゴリーにそれぞれ分類された。研究2では、信州大学生30名に対し実験を行った。状況×内容の計9条件の言い訳を聞き、その言い訳が有効であったかなどについて回答を求めた。その結果、過失状況において外的帰属の言い訳が有効であるが信憑性が低いと評価され、自己帰属はその逆の傾向が見られ、拒否状況では他者帰属が他の言い訳よりも有効であると評価される傾向が見られ、ごまかし状況では自己帰属が他の言い訳よりも有効であると評価される傾向が見られた。研究3では、信州大学生164名を対象とした質問紙調査を行った。各状況で、自己・他者・外的帰属の言い訳をどの程度行うと思うかについて質問を行った。その結果、3状況全てにおいて、自己帰属の言い訳が最も多く選択された。各状況において、評価の高い内容の言い訳が明らかになったにも関わらず、言い訳選択は自己帰属の言い訳が最も多くなっていた。このようなズレを意識することが、より良いコミュニケーション場面での方略の示唆につながると考えられる。